論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報　告　番　号	甲　第　984　号	氏　　名	小　林　実　喜　子
論 文 審 査 担 当 者	主　　査　　本　田　孝　行 副　　査　　菅　野　祐　幸・角　谷　眞　澄		

（論文審査の結果の要旨）

膵管内乳頭粘液性腫瘍（IPMN）は、形態およびムチンの免疫組織化学から、胃型と腸型 IPMN に２大別される。

IPMN33 例を用いて、各種免疫組織化学的検討から IPMN を分類し、臨床的・病理組織学的に検討した[胃表層粘液細胞マーカー（MUC5AC）、胃腺粘液細胞（MUC6、GlcNAcα1 → 4Galβ → R）、胃幽門および十二指腸上皮（PDX1）、腸上皮（MUC2、CDX2）、小腸上皮（CPS1）、大腸上皮（SATB2）]。年齢・性別および以下６項目について検討した［①病変の主座（主膵管型か分枝膵管型か）、②膵管内結節の有無、③幽門腺様構造の有無、④背景膵実質における萎縮の有無、⑤組織学的異型度、⑥浸潤癌合併の有無]。

その結果、小林実喜子は次の結論を得た。

1.　MUC2 により、胃型（n=17）、腸型（n=8）、胃腸混合型 IPMN (衝突型=7, 混成型=1)に亜分類された。

2.　胃型は胃腺窩上皮に類似し幽門腺様構造もしくは平坦病変を形成した。腸型は杯細胞より構成される絨毛構造もしくは低乳頭状病変を形成した。胃腸混合型は、胃型と腸型の両者を認めた。

3.　亜型間で年齢・性別に差はなかった。

4.　胃型と腸型において①③④⑤、腸型と胃腸混合型においても①③④⑤に有意差があった。胃型と胃腸混合型は有意差がなかった。

5.　全症例で MUC5AC と PDX1 は認められ、SATB2 は認められなかった。MUC6 は胃型および胃腸混合型が腸型に比べ有意であった。GlcNAcα1→4Galβ→R は胃型および胃腸混合型にのみ認められた。MUC2 と CDX2 は腸型が胃型や胃腸混合型に比べ有意であった。CPS1 は腸型が胃型に比べ有意であったが、腸型と胃腸混合型に有意差はなかった。

これらの結果より、胃型は分枝膵管に多く、幽門腺様構造を有し、膵実質の萎縮は見られず、低異型度病変主体であった。一方、腸型は主膵管に多く、膵実質の萎縮を伴い、高異型度病変主体であった。

腸型は「大腸の villous adenoma に類似」とされているが、本研究で十二指腸への分化が新たに証明された。

本研究において、１）年齢差がない、２）病変の主座が違う、３）混合型においては衝突型が多い、４）GlcNAcα1→4Galβ→R が腸型にはない、５）初期病変において両者は特徴的な免疫表現型を示すことから、胃型と腸型は組織発生が異なることが示唆された。

よって、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。